樫の木の木蔭にて

石橋春男

"Chi vas piano, va sano ; Chi va ano va lontano"
August walras—Sa vie son Oeuvre par Leroy

I

日本経済新聞の元旦（昭和62年）の社説に目をやると，「我々も樫の木を植えようではないか」というタイトルが飛び込んできた。その社説は次のようにしめくくっている。

「前世紀の前半から今世紀への代わり目を生きた近代経済学の構築者の一人ワルラスは，友人への手紙の中で『早く収穫したいなら野菜を植えればよい。だが，樫（かし）の木を植えようとする時はその木陰を孫に感謝されるつもりでなければならぬ』との趣旨のことを述べた。今のわが国経済が繁栄し続ける糧として，もとより財政再建その他についての短期的な工夫，つまり野菜づくりも大切であろう。しかし，21世紀に向けて更に一歩，前進したこの時点で，円高に揺るがされた昨年を振り返り，険しかろう前途を望んで思うのは，われわれにも樫の木を，今，自分の手で植える長い視野と意欲が必要なのではないかということである」

この社説で引用されたワルラスの言葉は，ワルラスが親友 George Renard に書き送った書簡の中に書かれた一節である。正月から執筆者の粋なはからいに襟を正す思いがした。社説で書かれている樫の木を植える土壌はどのようにして準備されたのか，またワルラスはどのようにして人参やサラダ菜でなく子孫に緑蔭を与える樫の木を植えようとしたのであろうか。

II

次の設問1と2について論述しなさい。

1. 土地所有権，借地権，不動産所有権と免役税契約との相違はなんですか。
2. 課税と徴税方法は国家財政にどのような影響を与えるだろうか。また，直接税

と間接税の相違について論述し，加えてそれらの種類を挙げ，これらの租税のいずれを選ぶべきか，その理論的根拠を明らかにしなさい。

これは，1834年2月20日ヘルマン・ハインリッヒ・ゴッセン (Heinrich Wilhelm Joseph Herman Gossen) が受けた公務員試験の問題である。

1810年6月7日にナポレオン統治下の Düren に，収税官の父 Joseph Gossen, 母 Mechthildes née Sholl の一人息子として生まれたゴッセンは，幼少の頃より数学を得意としたが，父の公務員への薦めもあって，1829年にボン大学に入学した。1831年2月28日のボン大学の成績証明書によると，彼は1829年の秋から1831年の春まで在籍し，1年につき19科目を履修し，それを3年間継続したが，成績・品行とも申し分ない優秀な学生であったという。1831年の春には，ベルリン大学に入学して5科目を履修したが，その年の夏，ベルリンでコレラが蔓延したため，ゴッセンはやむなく故郷に帰省せざるをえなかった。結局ボン大学に復学し，1833年まで在籍することとなった。ボン大学は1819年に創立された，新設大学であることもあってか，学生達の信頼を得るような教授が皆無であったと言われている。そのような中にあって，経済学者 Peter K Kaufmann は異色の存在であった。ゴッセンはカウフマンの教授する Kameralwissenschaft (財政学) を聴講する機会に恵まれた。また，ベルリン大学では，当時経済学および統計学者として著名であった Johann G Hoffmann から Staatswissenschaft (行政学) を聴講する機会にも恵まれた。ホフマンの基本的なポリシイは「すべての個人は彼の能力に応じて職業選択は自由であるべきであって，もしこの自由が妨害されるならば，社会の発展も阻害されざるを得ない」というものであった。こうした自由主義的思想はゴッセンに大きなインパクトを与えたようである。

ゴッセンが公務員試験を受験したときには上述の問題以外にさらに2問（地方自治と君主制の問題）あったが，政治が2問，経済が2問からなっていた。第一次試験合格に伴い，ゴッセンは1834年12月6日に高級官吏を含む試験委員のもとで口頭審問を受けた。後にプロシアの大蔵大臣となった Otto von Camphausen も受験生の一人であった。口頭審問は論理学，哲学，科学，歴史，財政，法律，政治経済学から広く，複雑な質問がなされたが，ゴッセンの成績は“sufficent”と評定されたという。

1847年2月23日には辞職願いが受け入れられて，官を辞したゴッセンは経済学の研究に没頭し，ついに1854年4月15日に「Entwicklung der Gesetze des Menschlichen Verkehrs und der Daraus Fliessenden Regeln für Menschliches Handeln」(人間の交易の法則とそれから導かれる人間行為の基準の発展）を世に送り出した。ホフマンやカウフマン教授の経済学の講義を受けて燃え上がった情熱は25年たってもさめやらず，ついにその情熱をみごと

に結集したゴッセンの行為は，ただただ感動せざるを得ない。

しかし皮肉なことに，Entwicklung はゴッセンが期待していた衝撃を学会に与えなかった。1年後ゴッセンは Entwicklung を回収するように依頼し，実際に回収が行われ，彼がそれを引き受けて手元に保有していたと言われている。

Nicholas Georgesch Roegen の調査によると，大英博物館は1865年に，ベルリン国立図書館，ミュンヘン大学図書館は1879年に，それぞれ Entwicklung を入手した。ローザンヌ大学法学部の経済学教授であり，近代経済学を創設したといわれている Marie Esprit Leon Walras (1834-1910) が読んだ1冊はミュンヘン大学図書館のものであった。ワルラスは，ローザンヌ大学の哲学教授である Charles-Secretan 教授の義兄であり，ミュンヘン大学図書館勤務の Halm 氏を通して6週間だけ借入を申し出た。ワルラスはついに1880年2月26日に Entwicklung の1冊を借り入れた。その後，古本屋から買入れたものがワルラスの蔵書となっている。

早くもワルラスは，1880年の11月7日のヴォー州自然科学協会で「ジェイムズ・ミルとH. H. ゴッセンの学説」を発表した。次いで，1881年2月21日にボン大学教授であった Hermann Kortum 博士に書簡を送り，ゴッセンの Entwicklung を仏訳し，その訳者ノートにゴッセンについて詳述したいので，ゴッセンに関係する情報を伝えてもらいたい旨の依頼をした。コルタム博士が7月21日の詳細なメモをワルラスに伝えてくれたことから，このメモに依存して，ワルラスは1885年の Journal des Economists に「知られざる経済学者ゴッセン」を執筆するはこびとなったが，これはワルラスのゴッセン研究として唯一の論文であり，現在でも一級の資料となっていることは言うまでもない。ワルラスの論文によりゴッセンの名は世に響き渡ったが，Entwicklung が世に出てから30年経って，やっと陽の目をみることになったと言えよう。

ゴッセンの存在を知るや彼の偉大さに気付いたもう一人の経済学者がいた。その経済学者とは太陽の黒点と景気循環が対応しており，その周期がほぼ10年であるという有名な太陽黒点説を打ちたてた William Stanley Jevons であった。彼の研究も頂点に遊しつつあった1882年8月13日の朝，英仏海峡のハスティングスの保養地で水泳中失神し，わずか47歳でその生涯を閉じてしまったジェボンズはワルラスより一年の後輩で，メンガーよりも5歳先輩にあたる1835にこの世に生を受けた。ジェボンズとワルラスとの出会いはライディン大学の Johan Baron D'Aulnis de Bourouill によってワルラスの交換の理論とジェボンズのそれとの類似点が指摘された1874年5月4日に始まる。1874年5月1日付でワルラスが「交換の数学的理論の原理」の抜き刷りを送ったことに対して，5月12日にジェボンズは自らの交換理論との同一性を認める書簡を送って来た。この中でジェボンズは，「均衡価格は希少性の比

に等しくなければならない」というワルラスの命題と自らの命題が同一であるという返事をワルラスへ書いた。このようなことが一体ありうるのか。全く異国の地において同時代に同一の理論が構築されることがありうるのか。こうした疑問が両者の脳裏に去来したことであったろう。

こうした2人の書簡はその後も続き，1874年6月号の「ジョルナル・デ・ゼコノミスト」誌にワルラス＝ジェボンズの書簡が掲載されることになった。ジェボンズはその後ワルラスとの書簡の中で，フランスの経済学者 Dupuit の発見を行ったり，また，1878年8月14日にはジェボンズの後任としてマンチェスター・オーエンズ・カレッジの教授となった Robert Adamson (1852-1902) よりゴッセンの名前と快楽と苦痛の数学的分析がジェボンズのそれとほとんど同一である旨の書簡を受け，ワルラスにそれを伝えてはみたものの，それによってジェボンズが受けた衝撃から立直るには相当の歳月を要したことであろう。しかし，すでにゴッセンは光りが差し込む二十数年前にこの世の人ではなかった。あれほど経済学の研究に心血を注ぎこみながらも，全く世の人に顧みられず，Entwicklung 出版後，肺結核と精神病に悩まされつつ，1858年2月13日に，たった48歳でこの世を去っていた。

ゴッセンの経済学は，苦痛と享楽の経済学を理論化し，1870年に始まる限界革命の主役であったワルラスに衝撃を与えた。しかしながら，ワルラスは主著「Elements d' Économie Politique, ou Theorie de la Richesse Sociale 1874-77」(純粋経済学要論) をすでに1847年に出版しており，ゴッセンから直接影響を受けたわけではなかった。ワルラスは機会あるごとに記してきたように，父 Auguste Walras (1801～1866) と Antoine Augustin Cournot (1801～1877) から大きな影響を受けた。ワルラスは，「純粋経済学要論」第4版の序文で，「経済学説の根本原理は父オーギュスト・ワルラスから借用し，この学説のための関数計算を用いる根本原理をクールノーから借用した」と自ら言明し，オーギュスト・ワルラスとクールノーにワルラス理論のフレームワーク構築が負うところ大であるとした。

オーギュストとクールノーは，パリのエコール・ノールマール・シュペリウール（高等師範学校）での学友であったため，クールノーからオーギュストに献本された1838年出版の「Recherches sur les Principes Mathematiques de la Theorie des Richesses」(富の理論の数学的原理に関する研究）とワルラスが出会ったのは，ワルラスが19～21歳の頃であったと言われている。クールノーの「ルシェルシェ」に触れた後，ワルラスが真剣に経済学の研究に取り組んだのは，1860年であった，とジェボンズ宛の書簡の中で明言している。その後10年して，1870年，ローザンヌ・アカデミーの経済学の教授に就任することになった。「実際1870年の中ごろから，2商品の交換の問題の解と多数商品相互間の交換の問題の解を把握した。それらの解を私は1871-72学年度の私の授業に導入しましたし，また1872年1月にジュ

ネーブへ行って公開講座でも説明しました」　このジェボンズ宛の手紙の内容で推察されるように，ワルラスの「純粋経済学要論」の骨格はすでに1871年には作り出されつつあったと言えよう。

クールノーの「ルシェルシェ」は1838年に出版されたとはいえ，誰にも顧みられることはなく，時を無為に過ごすことになった。ワルラスがローザンヌ大学に就任し，本格的に経済学の研究を始めた3年後の1873年になって，ワルラスはクールノー研究に没頭したようであった。ワルラスは，当時72歳の高齢となったクールノーに書簡を送り，1873年8月にパリ道徳政治アカデミーでクールノーの「ルシェルシェ」を紹介した。本著が出版されてから35年，ワルラスがクールノーの「ルシェルシェ」に出会ってから20年後にしてあらためて世に出され，まさに「苦折35年」が友人の子供の助力によって陽の目を見ることになったと言えよう。

クールノーの「ルシェルシェ」の翻訳本の序文において，クールノーの紹介記事を書いているIrving Fisher (1890～1962) によれば，クールノーは1801年8月28日フランスのオート・ソーヌ (Haute-Saone) のグレーで生まれた。最初の数学教育は，ベサンソン中学 (Lycee de Besancon) で受けたと言われている。1821年にパリのエコール・ノールマールに入学し，そこで数学の研究を続けた。それはパリのユルム街にあり，文科と理科からなるが，2度までしか受験できない高等師範学校中のエリート校として名高い。フランス独特のエリート養成機関として十目の見るところである。エコール・ノルマール・スペリウールは大学とは別個の高等教育機関で，授業料は無料であることに加えて，全寮制であるにもかかわらず寮費も免除されており，さらに公務員試補手当て (tratement de fonctionnaire stagiaire) も支給される。但し，卒業後10年は公教育機関への勤務が義務づけられている。

クールノーは，1834年にはリヨン (Lyon) 大学の数学教授，翌年にはグルノーブル (Grenoble) アカデミーの学長となった。1838年には「Recherces sur les Principes Mathematiques de la Theorie des Richesses」を出版，この翌年，Inspecteur General des Études (教育監察官) としてパリに呼ばれた。同年レジェンドヌール勲章のナイトを受け，45年にはofficier の勲章を受けた。これは15年間国民教育に貢献した者 (35歳以上) に授けられる教育功労賞である。さらに1854年にはディジョン (Dijon) アカデミーの学長となり，62年には教育界から退くことになった。

「ルシェルシェ」の不評を挽回せんがために，その改訂作業を行い，1863年には「Principes de la Theorie des Richess」(富の理論の原理)，つづいてそれを1867年に「Revue Sommaire des Doctorines Economique」として，より詳細な説明を加えて，簡略化を図った。翌1877年3月31日，パリにて亡くなった。

III

August Walras は，1801年2月1日，フランスのモンペリエで生まれた。モンペリエの中学校を卒業後 Ecole Normale Superieure に入学する。ヴァランス (Varance) に中学3年の学級担任として赴任した。

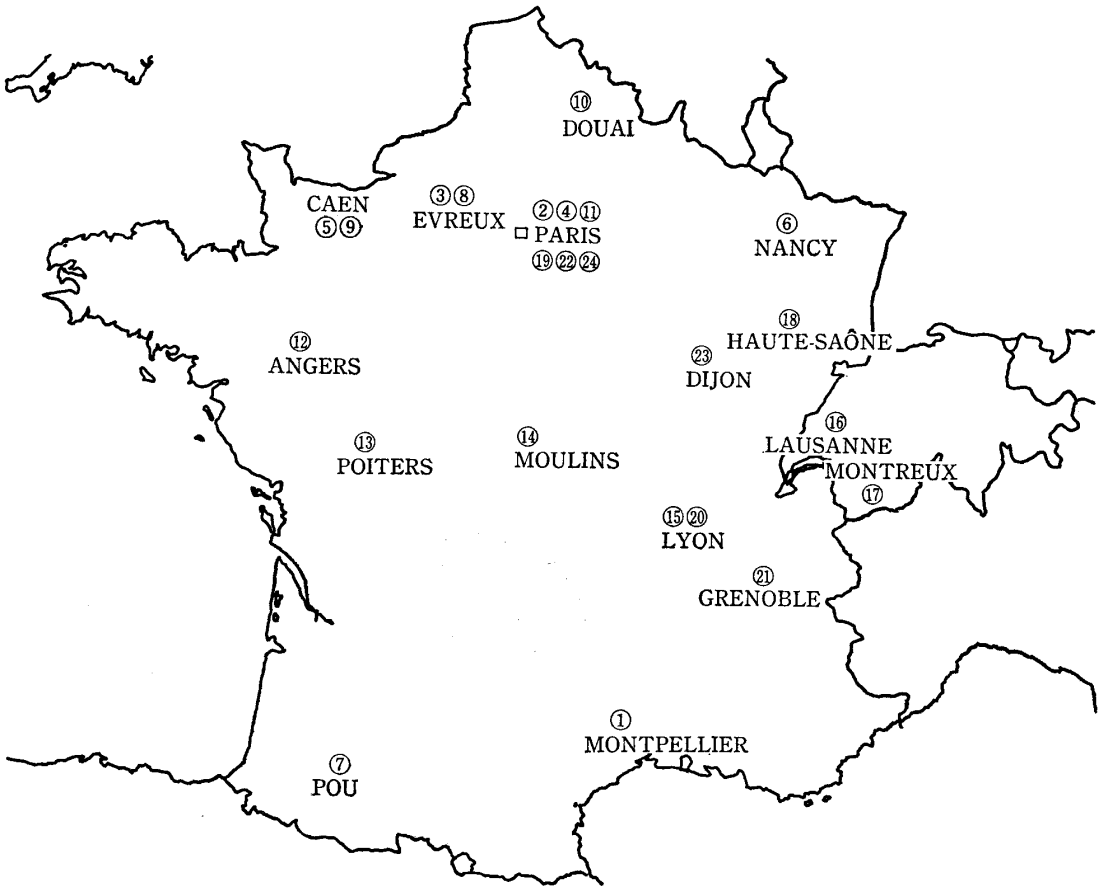
中学の学級担任教師 (rhetorique，現在では class de premiere) としての職に飽きたらず，パリに入り Salomon Halphen の家庭教師兼秘書，さらには公証人である Sensier 氏の会計係り兼 Sensier 氏の子供たちの家庭教師もした。Sensier 氏からオーギュストは年俸600フランのみならず，部屋や家具まで貸与された。やがてオーギュストは弁護士を志し，パリ法律大学で法律の勉強にとりつかれはしたが，「所有権の理論」に関していかなる講義も彼を満足さするものではなかった。オーギュストは独学での研究成果を1831年に出版した。それが「De la Nature de la Richesse et de l'Orgine de la Valeur」(富の性質および価値の起源について) である。この書はゴッセンの Entwicklung より23年早く，クールノーの「ルシェルシェ」より7年先立つ点が注目に値する所であるが，それ以上にオーギュストのこの書がレオン・ワルラスに与えた影響は測り知れないものであった。もし，このオーギュストの著作が書かれていなかったら，レオン・ワルラスがおそらく経済学者となり得なかったであろうし，またそれ以上に今日の近代経済学は基本的に大きく変わっていたことであろう。

この年 (1831年)，オーギュストはエヴルー (Evreux) の中学教師に着任した。1833年5月にはエヴルー中学校の校長に昇格し，翌34年に，当地では由緒正しき家柄に属する Sainte-Beuve 家の娘 Louis Aline と結婚した。アリーヌは6人姉妹で，彼女らの子孫の一人 Laure de Saint-Beuve はシャルトルに，修道士のRene de Saint-Beuve 師はイギリスのウイグ島に住んでいるようである。1834年12月16日にオーギュストの腕の中で大きな泣き声を上げた赤子が，経済学の体系化に貢献するとは父親自身夢にも思わなかったであろう。この赤子こそレオン・ワルラスその子であった。

1835年11月にはエヴルー中学の教員を辞職し，オーギュストは再度パリに4年間遊学の後，リール大学の哲学教授に任命されたが，エヴルーから遠いという理由から妻アリーヌの反対にあい，やむなく，妻子を養うために Caen 中学の教員となった。1845年にはカーン文科大学のフランス語講師に，1847年には文学博士号を取得した。その後視学官として Nancy に，次いで Pou へと派遣されたが，ついには大学教授の椅子に座ることができずに1862年には教育界から引退することになった。オーギュストの長い教育生活の中で，彼の脳裏に去来したものは経済学の研究であり，大学教授として経済学を生涯研究し続けたいという希望

であった。しかし，多くの優れた著書や論文を生みだしながらも宿命というのであろうか，文部省からの要請により，生涯中学教育の指導者としての立場から身を引くことができなかった。

父オーギュストは自分の希望を最愛の一人息子レオン・ワルラスに託しながら1866年，65歳にて他界した。



オーギュスト・ワルラス，クールノー，レオン・ワルラスの足跡

オーギュスト・ワルラス

① 1801, 2, 1 MONTPELLIER で誕生
② PARIS の Ecole Normale Superieure に入学
③ 1831, EVREUX へ中学教師として赴任。
④ 1835, PARIS へ
⑤ 1839, CAEN の中学教師に赴任
⑥ 1847, 視学官として NANCY へ
⑦ POU へ,

レオン・ワルラス

⑧ 1834, 12, 16 EVREUX に生まれる
⑨ 1844, CAEN の中学に入学
⑩ 1850, DOUAI の中学へ転校
⑪ Ecole des Mines へ入学
⑫ ANGERS
⑬ POITERS
⑭ MOULINS
⑮ LYON
⑯ LAUSANNE
（⑫～⑯：ローザンヌへ逃亡）
⑰ MONTREUX にて没す

オーギュスタン・クールノー

⑱ HAUTE-SAONE にて生まれる
⑲ PARIS の Ecole Nolmale Superieure に入学
⑳ リヨン大学の学長となる
㉑ グルノーブルアカデミー の学長となる
㉒ PARIS へ
㉓ ディジョン・アカデミーへ
㉔ PARIS で没す

V

赤子はすくすく成長し，両親の期待を担って高い教養が授けられていた。レオンは1844年には Caen の中学校へ，1850 年には Douai の中学校へというように，父の転勤に伴って教育場所が次から次へと移り変わっていった。1853年には Ecole Polytechnique (理工科大学) を受験したが，2度にわたって失敗し，Ecole des Mines (鉱山学校) に入学することになった。

フランスは学歴社会かと問われると，フランスほど学歴社会が進んでいる国はないと答えるのが常である。フランスは10年生から3年生（日本の小一がフランスの10年生にあたる）までが義務教育であるが，2年生，1年生はいわゆる Lycee (リセ) で中等教育にあたり，ここでバカロア試験を受験して，大学に進学することになる。

ワルラスが受験したエコール・ポリテクニックはエコール・ノールマール・シュペリエール (クールノーや父オーギュストが卒業した) さらに ENA (École Nationale d' Administration…国立行政学院) と並んでエリート養成機関であって，一般にグランゼコール (Grandes Écoles) と呼ばれている。その中でも超エリート養成機関は ENA であって，大学の法学部か経済学部のいずれかの卒業生とキャリヤー組しか受験資格が与えられておらず，年に 100 名程度しか合格者を出さない超エリートコースとなっている。ここの卒業生 (énarque) は大蔵省の主計官や参事院，会計検員査の卵となることは言うまでもないが，1945年から1980年の35年間の間にエナークは2500名に達し，彼らが完全にフランス全土を支配していると言っても過言ではない。こうした意味では，フランスこそまさに超エリートが支配する階級社会なのである。

鉱山学校中退後ワルラスは，文芸批評や美術批評などに興味を持ちはじめ，ついに「Francis Sauver」という小説を出版するまでの熱の入れようであった。それは 1858 年のことであって，この年の8月，父オーギュストは息子のこうした振る舞いを見かねて，Gave de Pau のほとりを二人で散歩しているときに，歴史学か社会科学の研究に没頭すべき大切な時期が来ていることを懇々と説いた。

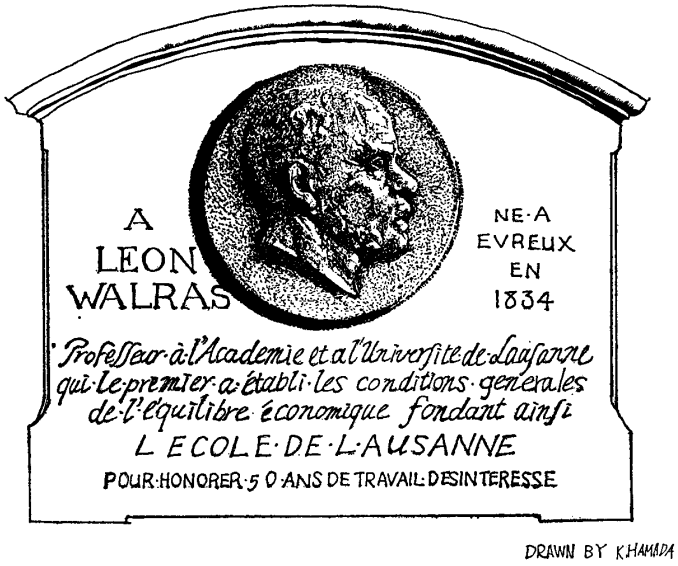
ワルラスは目の前のうろこがとれたかのように，経済学の研究に満身した。ワルラスが世にでる絶好のチャンスが訪れた。ワルラスが26歳のとき，つまり1860年の7月にスイスのヴォー州で国際租税会議が開かれ，そこでワルラスが発表した土地国有化論と賃金重税論に聴衆はどよめきたち，ワルラスにさかんな拍手が送られた。鳴りやまぬ拍手の中を冷静な眼でワルラスを見つめていた官吏がいた。この人こそ，ワルラスをローザンヌ大学に強引に誘ったヴォー州の教育局長，Louis Rouchonet であった。

ルショーネの熱心な薦めにより，普仏戦争のさなか（1870年7月19日），ワルラスはプロシア軍に包囲されていたパリを逃れながら南下し，アンジェー（Angers），ポアチェ（Poiters），さらにムーラン（Moulins），リヨン（Lyon）を経由し，ローザンヌに無事到着した。この時がまさに1870年12月16日であり，たまたまワルラスは36回目の誕生日にローザンヌ・アカデミーの教壇に立つことになった。

こうして1892年にローザンヌ大学（1891年にローザンヌ・アカデミーからローザンヌ大学になる）の経済学教授の椅子を Vilfredo Pareto に譲るまでワルラスのひたむきな努力と経済均衡体系樹立への挑戦が続けられた。

1909年6月10日（ワルラス75歳）にワルラスの研究生活50年を祝んがために，ローザンヌ大学は L' Aula du Palais de Rumine において盛大な式典を催し，青銅の記念碑を旧ローザンヌアカデミーのエントランス・ホールに掲げた。奇しくもその碑は，母アリーヌの遠縁にあたるフランス文芸批評家でローザンヌ・アカデミーの教授を務めた Charlee Augustin Sainte Beuve の近くにおかれた。

この記念碑は「1830年にエヴルーに生まれ，ローザンヌ・アカデミーおよび大学の教授にして，はじめて経済均衡の一般的条件を樹立することによりローザンヌ学派を創設したレオン・ワルラスへ，無欲な研究の50年に敬意を払うために」という内容のものである。



レオン・ワルラス記念碑

この式典には各国の著名な経済学者から祝電が寄せられた。例えば次のような経済学者がそれである。エッジワース（同年6月8日），シュンペーター（6月7日），タウシック（6月8日），ヘンリー・ムアー（5月19日），シャルル・ジード（6月5日），パレート（6月6日），この他にも世界中から多くの経済学者が直接式典に臨んだり，また祝電を寄せたりした。こうした経済学者こそまさにワルラスが植樹した樫の木が与えた緑陰のもとで，ワルラスの恩恵に浴している人たちである。

さらに，1934年にはワルラスの生誕100年を記念して，計量経済学会（Econometric Society，会長I・フィッシャー，副会長F・ディビィジア）は，ローザンヌ大学が経済均衡理論の授業のために一つの講座を提供し，そこから生まれた学問的功績がいかに学会のために役立っ

ているかに感謝の念を表明する書状を送った。この書状には，実に23ケ国の 317 名に達する著名な経済学者の署名が記されている。

これからもワルラスの樫の木はより大きく成長し，その幹を太らせ，豊かな葉をつけてたくさんの経済学者の憩いの場所となるであろう。

（本学経済学部教授）